

内的作業モデルと愛着の世代間伝達

東京大学教育心理学研究室 遠藤利彦

Internal Working Models and Intergenerational Transmission of Attachment

Toshihiko Endoh

Many theorists suggest that an individual's past relationship experiences with his or her own parents are carried forward and reenacted in subsequent relationships, especially present relationships established with his or her own children. This notion of intergenerational transmission of caregiver-child relationships originated in psychoanalytic theories, and later came to be explored in association with child-maltreatment, attachment, and so on. Bowlby postulated that children internalize their transactional patterns with caregivers and construct representational models, i.e. "internal working models", of self and other in attachment relationships, and that these models, used to perceive and appraise informations and to plan future actions, then govern relationship patterns with others. Currently Bowlby's concept of "internal working models" offers a new framework for understanding intergenerational transmission of attachment relationships. In this paper, a wide variety of theoretical, clinical, and empirical studies concerning this theme were reviewed, and, in addition, directions for continued research were discussed.

目次

- I. 本論の目的
- II. 精神分析における諸理論
- III. 虐待の世代間伝達
- IV. “内的作業モデル”概念の概要
- V. 愛着の世代間伝達に関する実証研究の概観
- VI. 愛着の世代間伝達のメカニズム
- VII. 総括と今後に残された課題

I. 本論の目的

本来、Bowlbyの愛着理論(Bowlby, 1969, 1973, 1980)は、“揺りかごから墓場までの愛着”(Bowlby, 1979)を扱う、パーソナリティ発達総合理論として提唱されている。が、これまでの大半の研究は、乳幼児期の愛着行動に主たる焦点を当て、乳幼児期以降の愛着の発達を相対的に軽視してきたということが言える。しかし、現在、愛着研究は、きわめて大きな分岐点にさしかかっている。愛着研究者の実証的関心が、乳幼児期の愛着パターン(およびそれと養育者の関わりとの関連性)の分析から、生涯発達過程を視野に入れた、それ以降の多様な愛着関係の分析へと確実に移行してきているのである(Greenberg et al., 1990; Parkes et al., 1991)。(生涯

発達過程の中で経験する重要な関係の1つである以上)親として子に関わる関係もその例外ではない。現在、多くの研究者が、親の側の表象レベルの愛着、すなわち、親が自身の被養育経験を基礎に形成した“内的作業モデル”(internal working model)(Bowlby, 1973, 1980)を問題にし、それが、自分の子との関わりにどのような影響をもたらすのか、また子の愛着パターンの形成にどのように関与するのか(愛着関係の特質は世代から世代へと受け継がれていくのか)ということ問い始めている。

しかし、関係性の特質が1つの世代から次世代へ受け継がれていくという問題に対する注視は何も愛着研究の中で始まった訳ではない。この問題に関する研究の歴史は実のところかなり古い。精神分析においては、Horney(1933)やDeutsch(1945)以降、多くの学者がこの問題を取り上げ、詳細に論じている。また、虐待研究においては、Kempe et al.(1962)が被虐待児症候群という術語を提唱した時点で既に虐待-被虐待関係の世代間伝達(虐待された子が虐待する親になる)の問題に言及しており、その後のこの領域における臨床的、実証的データの蓄積には目を見張るものがある¹⁾。愛着の世代間伝達に関する今日の諸研究は、実は、こうした研究の蓄積の上に生まれてきたものと考えられる。

本論の目的は、こうした関係性の世代間伝達に関する議論の萌芽から、現代の動向に至るまでを、幅広く概観、整理することである。具体的に、本論では、まず、精神分析および虐待研究の中で世代間伝達の問題がどのように扱われてきたのかを見る。そして、その上で、Bowlbyの“内的作業モデル”概念について概説し、それを理論的基礎とする愛着の世代間伝達の問題について、可能な限り精細に議論する。さらに、今後に残された課題を提示して論を結ぶ。

II. 精神分析における諸理論

子ども時代の対人関係、特に親との早期の体験が、後に個人が持つことになる様々な対人関係に多大な影響を及ぼすという考え方は、S. Freudの発達理論の基礎をなすものと考えられる。彼は、子が無意識裡に親の価値観や目標を取り入れ、一生涯、その取り入れた親のイメージを基礎に、自分の住まう環境に対して予測を立て、働きかけ続けると仮定していた(Minsky, 1986)。しかし、Freudにおいてはまだ、関係性のパターンそのものが世代間で伝達されるということに関して直接的な記述は見られない。おそらく、精神分析の枠内で、関係性の世代間伝達を、実質的に問題にした最初は、Horney(1933)と考えてよいだろう。彼女は、母親が、女性としての性役割や女性性を拒否し、強い男性コンプレックスを有する時、結果的にそれが娘に及び、娘も妊娠、子育てといった女性としての生活領域で不適応を起こす確率がきわめて高くなるということを指摘している。他にも、Deutsch(1945)やRheingold(1964)が、こうした性役割や女性性を中心に据えた議論を展開している。こうした論者には、母親に女性性や女性の生殖機能に対する不安や両価的感情が潜む時、その娘も、自己の女性性を嫌悪し低く評価するようになり、自分が母親になることを受容できなくなるという共通の認識がある。母親による娘の女性性の発達阻害に起因して母子関係の崩壊が次世代においても繰り返されるというのである²⁾。

HorneyやDeutsch以降になると彼女らの議論をさらに発展させる形で、特に母子の同一化、あるいは母親像の内在化といったものを世代間伝達の基礎として強調する向きが出てくる。Benedek(1959, 1960)は、望ましい母性行動が、母親の自分の子に対する同一化、さらに子ども時代における自身の母親との同一化、その双方を通じて可能になるという考えを有していた。子ども時代の母子の関係がフラストレーションと敵意に満ちたものである場合、女兒の母親に対する同一化が困難となり、その

結果、女兒が母となった時に母性行動に失調が見られるようになるとしたのである。Klein(1937)、Coleman et al.(1953)、Fairbairn(1952)、Sullivan(1953)、Winnicott(1965)、Fraiberg et al.(1975)等も、これと類似した議論を展開している。こうした論者の多くが有する共通の認識は内在化した母親の、あるいは関係の表象に関連させて、子が自己の定義を、愛されたり、拒絶されたりする自己の感覚を発達させるということであり、そして、この早期の自己の定義、自己の意識や、母親との関係をめぐる問題の連想、記憶、感情が、その後の対人関係、ひいては親子関係に決定的な意味を有するということである(Chodorow, 1978)。実のところ、こうした発想は、後述するBowlbyの内的作業モデルの基本的仮定とほとんど変わるところがない。Bowlby自身が指摘しているように、愛着に関する内的作業モデルという概念は、こうした精神分析の諸理論を踏襲したものに他ならないのである。

他にも、子を欲する願望(Jacobson, 1968)、妊娠願望(Lerner et al., 1967)、共感性(Olden, 1958)の発達という観点から母子関係(厳密には母娘関係)の世代間伝達に言及した精神分析家がいる。また、Buxbaum(1978)のように、内在化された母親に関する表象、記憶というのとは多少違った意味で、だっこされたり、あやされたりするといった母子の身体的相互性に由来する、無意識の身体的記憶を子が母となった時の育児行動の基礎に仮定し、世代間の連続性を論じている学者もある³⁾。さらに、健全な発達の潜在的条件を満たしながら二次的な遅滞(pseudobackwardness)を示す子や小児心身症を示す子の母親に、自身の母親との間の未解決の葛藤を、子との間で無意識に再演している者が多いという臨床報告もある(Berger & Kennedy, 1975; Sperling, 1968)。

経験された“過去”を重視する精神分析において、関係性の世代間伝達が問題にされるのは半ば当然の帰結であり、それだけに多くの研究者がこの問題に取り組んだとしても何の不思議もない。しかし、多く研究がなされているということと、そこで得られた知見が妥当であるということとは全く別次元のことである。精神分析的な研究および理論化のほとんどは、少数の病理的事例の分析および研究者の臨床的直観の上に成り立っている。その意味で、この領域で得られた知見をどこまで一般化できるかについては疑問が残るのである。しかし、見方を転じるならば、こうした精神分析理論の妥当性を、現在、虐待研究や愛着研究が実証的に吟味していると言えなくもない。虐待研究は病理的な関係性の世代間伝達

を、愛着研究は主に健常枠内にある関係性の世代間伝達を精緻に分析することを通じて、精神分析理論の適用性を検討し、そしてこうした理論の下では得られなかった新たな知見を提示しているとも見ることが出来るだろう。

Ⅲ. 虐待の世代間伝達

虐待された子が虐待する親になるという仮説は、Kempe et al. (1962) が被虐待児症候群という術語を提唱して以来、筆者が検索した範囲内でも、既に50以上の研究の中で問題にされている。研究の形は、ケース研究から、比較対照群を設けた実証的研究まで多岐にわたっているが、ここでは、1960年代、1970年代、それぞれの諸研究を扱った代表的な概観論文2つを中心に、それまでの研究の動向を追い、さらに1980年代以後の展開を含めて、虐待という崩壊した関係性が世代を超えて繰り返されるかどうかについて考える。

Spinetta & Rigler (1972) は、主に1960年代に行われた20ほどの研究を概観し、そのほとんどの研究に、虐待された子は虐待する親になるということの証左を認め、彼ら自身その仮説をある程度妥当なものだと結論している。この時期の代表的な研究であり、現在でも引用されることが多いSteele & Pollock (1968) の研究は、子の虐待で心理治療を受けている60人の親に面接し、その親全員が過去被虐待児であったという衝撃的な報告をしている。ただ、1960年代の研究については、対照群の欠落など方法論的な問題が数多く指摘されている (Garmezy, 1974)。

Spinetta 等の研究が発表されて10年後、今度はFriedrich & Wheeler (1982) が、1970年代の研究を概観、比較対照群を持つ11の研究の中の7つの研究で世代間伝達を支持する結果が得られていると報告している⁴⁾。代表的な研究を挙げておくと、Conger et al. (1979) は、子を虐待する親の47%が過去被虐待児であったのに対し、対照群の方は6%に過ぎなかったことを記述している。しかし、Friedrich等は、虐待する親に被虐待の経験を有する者が相対的に多いということを確認しつつも、調査の方法、あるいはサンプルの等質性等からして疑わしい研究も少なくはないということを指摘し、虐待の世代間伝達に関して明確な結論づけをすることは時期尚早であるとしている。

1980年代に入っても、依然世代間伝達を支持する知見が多く得られている (Horowitz & Wollock, 1981 ; Kotelchuk, 1982 ; Polansky et al., 1981 ; DeLozier, 1982 ; Herrenkohl et al., 1983) が、この時期になると、

被虐待経験のあるサンプルを追跡し、現実に親となった時に自分の子にどのように接するかを調査する、部分的にプロスペクティブな研究も行われるようになってくる (Hunter & Kilstrom, 1979 ; Altemeier et al., 1986 ; Egeland & Jacobvitz, 1987)。Egeland等は、貧困を含む、様々なストレスにさらされている母親160人を対象とした研究において、出産後54ヶ月間の追跡期間中、被虐待経験のある母親の70%が自分の子を何らかの形で虐待したのに対し、対照群ではその率が43%であったことを報告している (身体的虐待の発生率だけを見ると前者34%、後者3%)。彼らは、劣悪な状況下に置かれたハイリスクサンプルということで、総体的に数値が高くなっていることを認めつつ、この群間の差異から、親の被虐待経験と現在の貧困やライフストレス等が結びつく時、かなりの確率で虐待が生み出されるということを示唆している。

虐待の世代間伝達を支持する研究が依然多い中、一方で、方法論の問題を含めて、世代間伝達の仮説に疑念を表明する学者も相当数に上るようになってくる (Cicchetti & Aber, 1980 ; Hertzberger, 1983 ; Stark, 1985 ; Kaufman & Zigler, 1987 ; Widom, 1989)。Kaufman等は、Hunter & Kilstrom (1979) のプロスペクティブな研究が提示した伝達率18% (出産直後の面接で自らの被虐待経験を報告した49人の母親のうち9人が1年後までに自分の子を虐待した) を取り上げ、これが回顧的方法 (実際に自分の子に対する虐待が認められた母親に過去の被虐待経験を問う) によると、生後1年で自分の子に対して虐待を示した母親10人中9人までが被虐待経験者ということになり、伝達率は90%にも上ってしまうということ論じている。従来、虐待者を分母、その中の被虐待経験報告者を分子とする、いわゆる回顧的算出法では、伝達率を過大に評価してきた可能性が強いのである。彼らは、虐待の世代間伝達の確率を正確に評価しようとするならば、被虐待経験のある者を縦断的に追い、親になった時点で、実際にどれだけ児童虐待のケースが認められるかを明らかにすべきだとしている。彼らは、それまでのこうした方法や手続き上の限界、誤りを考慮すると、虐待の世代間伝達の確率はせいぜい30±5%に止まるのではないかと見ている。しかし、Zeanah & Zeanah (1989) のように被虐待経験を持つ親には、自分の生育歴を理想化したり、正常なものとして報告する者もかなりあるため、回顧的、自己報告的研究が逆に伝達率の過小評価につながっている可能性もあると指摘する向きもあり、Kaufman等が示した数値もあくまで仮説の域を出ないと言うべきだろう。結局、3世代にわ

たる真の縦断研究でも行われないう限り、虐待の世代間伝達率の正確な評価はできないと結論すべきなのかも知れない。

確かに、これまでに得られている数値だけから見れば、虐待された子が虐待する親になるという可能性は相対的に高いということが言えそうである。(Kaufman等は、自分達が示した $30 \pm 5\%$ という限定的な数値でさえ、一般サンプルの虐待発生率の約6倍に相当すると見ている。)しかし、虐待という事実があったか否かということだけに焦点を当て、その虐待を生む基盤となった関係性の特質を十分に問わないで来た、これまでの研究からは、被虐待の歴史と現在の虐待の間に表面的な連関が見出せたとしても、その連関を成り立たせている本質的な要因あるいはメカニズムがいかなるものかということとは必ずしも特定できないのである。虐待の世代間伝達を説明するものとして、これまで社会的学習やモデリングの理論(Bandura et al., 1961; Barahal et al., 1981; Hall & Cairns, 1984; Burgess & Youngblade, 1988; Simons et al., 1991)が採られることが多かったが、(“総称としての虐待”の世代間伝達が認められてはいても)身体的虐待は身体的虐待、遺棄は遺棄というように虐待行動の具体的なパターンに連続性が必ずしも認められないということから、こうした理論の説明力に疑問を持つ研究者も多い(McCord, 1988; Sroufe & Fleeson, 1986; Egeland et al., 1988; Belsky & Pensky, 1988; etc.)。つまり、虐待という行為だけに着目して、それが模倣学習されるという見方だけでは足りないということである。結局、従来の研究は、虐待行為が世代間で伝達されやすいということの証左を提示するものではあっても、それがなぜかということをはっきりと示すには十分ではなかったのである。ただし、近年、虐待を、病んだ親子関係の側面、あるいは愛着関係の障害の1つの表れであると考え、世代間で受け継がれるのは関係の“全体的な意味”(Sroufe & Fleeson, 1986)であって、虐待行為の伝達はそれに付随した現象に過ぎないという見方がより一般的になってきている(DeLozier, 1982; Altemeier et al., 1986; Egeland et al., 1988; Zeanah, & Zeanah, 1989; Widom, 1989; Sameroff & Emde, 1989; Sroufe, 1988)。愛着理論に依拠して、単に被虐待一虐待という事実ではなく、より包括的に親子の愛着関係全体を扱おうという視点から、より徹視的に虐待の連続性の機序を把捉しようとする向きが出てきているのである⁵⁾。

IV. “内的作業モデル”概念の概要

愛着の世代間伝達に関して議論を展開するためには、まず、その理論的基盤である内的作業モデル概念に関して多少ともふれておく必要がある。本章では主に、この概念の提唱者である Bowlby 自身の記述に従って、その定義、機能等について概説することにした。

愛着に関する内的作業モデルという概念自体は、既に1969年の Bowlby の *Attachment and Loss, Vol. 1* で問題にされている。しかし、彼が当初、愛着理論を精神分析理論に代わるものとして強く打ち出したということもあって、早くは愛着理論の持つ進化論的、エソロジー的側面が専ら注目を集め、精神分析理論(特に対象関係論)に基礎を持つ内的作業モデル概念の方は1980年代前半まで見過ごされることになる(Bretherton, 1990a)。近年 Bowlby の愛着理論が、この内的作業モデル概念をもって再注視されるようになった背景には次のような流れが考えられる。まず、外的に捉えられる行動上の母子の相互作用(interaction)パターンの研究に陰りが見え始め、近年実証的研究の関心が、主観的側面を含めた母子の関係性(relationship)(e. g. Zeanah & Anders, 1987; Sameroff & Emde, 1989)、関係の内的構成(Sroufe & Fleeson, 1986)等に移行してきていること。また、これに関連して、乳幼児の行動や愛着の質を理解する上で、親側の観察される行動だけではなく、養育や愛着関係に対する主観的な考え方を精緻に分析する必要が生じてきたこと(George & Solomon, 1989; Bretherton et al., 1989; Biringer, 1990; Cramer, 1987; Brazelton & Cramer, 1990; Goodnow & Collins, 1990)。さらに、冒頭でも述べたが、多くの愛着研究者の関心が、乳幼児期以降の多様な愛着関係の分析、および愛着パターンの時間的連続性の検討に向き始め、その連続性を支えるメカニズムとして、早期の愛着経験が個人に内在化され、それがその後の対人関係のモデルとして一貫した機能を果たし続けると仮定せざるを得なくなったこと。それと同時に、乳幼児期以降の愛着をどう測定するかということが問題になり、愛着に関する記憶、思考、感情という内的要素を直接分析の対象にせざるを得なくなったこと、などである。

Bowlby (1973, 1980, 1982) は、子どもが愛着対象との具体的な経験を通して、愛着対象への近接可能性、愛着対象の情緒的応答性等に関する表象モデル、すなわち内的作業モデルを有するに至ると考えた。こうした愛着

経験の内在化は、愛着対象に関するモデルの形成としてのみならず、自己に関するモデルの形成として相補的な形で進行していく。母親が支持的で応答的である時、子は母親を良いもの、“安定した” (secure) ものとして内在化し、さらにそれに応じて自分を価値ある存在、愛され、助けられるに値する存在と表象可能になる。一方、母親が非応答的であったり、拒絶的であるような時、子は母親を悪いもの、“不安定な” (insecure) ものとして内在化し、それに応じて自分が愛され、助けられるに値しない存在であるという固定的な表象を作り上げてしまう。Bowlby (1973) 自身の記述に従うならば、愛着対象の作業モデルの中核をなすのは、その愛着対象が誰であり、どこに存在し、またその愛着対象からどのような応答を期待できるかについての主観的な考えである。同様に、自己の作業モデルの中核をなすのは、自分自身が愛着対象にどのように受容されているか、あるいは受容されていないかについての主観的な考えである。

Bowlbyによれば、この愛着対象と自己に関する相補的なモデルは、乳幼児期、児童期、青年期という未成熟な時期に徐々に形成される。ただ、Bowlbyは、特に生後6ヵ月から5歳くらいまでの比較的早期の段階を重視し、それ以降、漸次的にモデルは安定性を増し、可塑性を減じていくと考えた⁶⁾。個人は、この徐々に安定性を増す内的作業モデルを基礎に、対人的情報を知覚、評価、さらに未来の予測を立て、自己の行動のプランニングを行っていく。そして、こうして個人的な内的表象モデルが一貫した機能を果たす結果、外的な愛着行動も一貫性と安定性を備えていく。このモデルは、特定の愛着対象との関係を離れても、有効である。ポジティブな愛着表象を有する子は、親との関係を離れても、その対人世界に寄せる信頼や高い自尊感情に起因して、例えば、同朋や他の大人に対して、一貫して安定した愛着行動を示すことができるのである (Troy & Sroufe, 1987; Sroufe, 1988; Crowell & Feldman, 1988; etc.)。結局、内的作業モデルは、愛着に関連する多様な情報の統合、あるいは注意、記憶、感情、行動等の体制化を進行させる個人特有の心的枠組みとして、大概は意識外で、重要な機能を果たすようになる。

Bowlby (1980) は、また、内的作業モデルを、その認知的構造や機能の観点から、個人が様々な不適応に陥る事態と、そしてその基底に存在する防衛メカニズムと関連づけて論じている。彼は、作業モデルに関わる防衛的な情報処理過程に、次の3つを仮定している。①内的作業モデルは、知覚、符号化の際の外的情報の選択的取捨に関与している。無論、選択的取捨は、事象の多様な側

面個々の相対的重要性にしたがってなされる。しかし、例えば、愛着欲求が適切に満たされないような相互作用に長くさらされた子の内的作業モデルは、愛着のシグナルや愛着経験に伴う感情等を、長期的にあるいは永続的に意識から排除するように機能する。②また、外界からもたらされるあらゆる情報が、1つの固定的な作業モデルの内容や方向性に合致するように、処理過程で変えられてしまうような場合も存在する。③さらに、人は自分自身や愛着対象について、それぞれ単一の内的作業モデルを形成している訳では必ずしもなく、複数のモデルをしかも場合によっては相互に矛盾もしくは解離した状態で保有している可能性が存在する。新奇な状況に接した際に、既存のモデルと、モデルの焦点 (誰に関するモデルかということ) は同じでありながら、全く異質の、しかも整合一貫しない新たなモデルが作られてしまうような場合である。そこには、意味記憶的表象とエピソード記憶的表象 (Tulving, 1972) の解離といった事態も含まれる。例えば、親や自分に関して抱いている漠然とした感情 (私の親は、尊敬すべき人物で、私はその親にとってもかわいがられる存在であるというような一般的な意味的表象) と、具体的な個別のエピソード (親にひどく虐待されたことの個々の具体的思い出等) が著しく矛盾し、個人の中で両者が有機的に統合されることがないというようなことである。Bowlby (1980) は、一時的な認知的、情緒的葛藤のみならず、より長期にわたる、対人的不適応、虐待等の愛着関係の障害の背景に、以上のような防衛的情報処理過程のいずれかが関与していると想定している。

この内的作業モデルに関する議論は無論 Bowlby だけで止まっている訳ではない。Bowlby以後、多くの研究者が、最近の認知心理学との絡みで、この概念の精緻化を進めている。特に、内的作業モデルを支える情報処理機構あるいは記憶システムをどう把握すべきかということに関して、研究者間で熱い議論が交わされている (Bretherton, 1990a; Crittenden, 1990; Stern, 1989; etc.)。本来ならば、Bowlby以外のこうした理論化についても深く掘り下げて議論すべきところだが、ここでは紙面の制約もあり、割愛する。ただし、この点に関しては、遠藤 (1993) に比較的詳しい解説があるので参照されたい。

V. 愛着の世代間伝達に関する実証研究の概観

愛着の世代間伝達に対する注視も実のところ Bowlby

(1973) から始まっている。彼は、上述したように、早期の被養育経験に由来する内的作業モデルが、多くの対人関係に適用され、その関係性の特質を規定すると仮定していた訳だが、当然自分の子どもとの関係もその例外ではない。彼は、親が、自分の子との相互作用を、自身の内的作業モデルの内容にしたがって方向づけることにより、子の中に、親と同様の愛着の基盤を準備させる可能性が高いということを示唆している。しかし、Bowlby自身は、この仮定を実証的に検討するということをしていない。

実証的観点から初めてこの問題に取り組んだのは Morris (1981) である。Morris は、母子36組を対象に、母親に対する臨床的面接（母親の被養育経験に関する聴取）と子どものストレンジ・シチュエーション (SSP) における愛着パターンとの関連性を問題にし、不安定な家族関係構造（親同士の結びつきよりもある親と子どもの結びつきの方が強く、世代境界が不明確であるとか、子どもと親の間に役割の逆転が見られるような家族構造）の中で生育し、自身の母親を養護的でなかったと認識しているような場合、子の愛着パターンが不安定なものになる確率が高いことを見出している。そして、ある臨床の専門家に、母親の生育歴に関する様々な情報を提示し、現在の母子関係の予測を求めたところ、36組中31組において正確な予測がなされたと報告し、母親の愛着に関する表象が現実の母子関係に密接に関連することを示唆している。この Morris の研究は、SSP における子の愛着行動と臨床的面接における母親の愛着表象を照らし合わせて見るという現在の一般的な研究スタイルの礎石を築いたという点で止目に値する。Lyons-Ruth et al. (1984)⁷⁾ や Ricks (1985)⁸⁾ 等も基本的に Morris の方法を踏襲し、その研究知見を裏づけるような結果を見出している。

しかし、Morris にあってはまだ、母親に対して臨床的面接を行うとは言っても、必ずしも構造化された手順によるものではなく、その分析は相対的に臨床的な直観によるところが大きかったと言える。また、その面接記録を、母親自身の愛着表象（内的作業モデル）に焦点化して体系的に分析する（例えばあるタイプに分類する）という視点もその時点ではまだ存在していなかった。その意味で、愛着研究の枠内において世代間伝達研究が隆盛になってきたのは、実質的に Main & Goldwyn (1984)、Main et al. (1985) が成人愛着面接 (AAI) と呼ばれる半構造化された面接方法を案出し、そしてそれを通じて、

愛着表象の分類システムを確立してからであると思えるべきかも知れない。

Main 等は、基本的に個人に内在化された愛着に、時間的安定性が存在すると仮定し、子どもの示す愛着スタイルと、成人の示す愛着スタイルおよび愛着に関する表象の間には何らかの対応性が存在して然るべきだと考えた。すなわち、乳幼児の SSP における行動の組織化と成人の愛着に関する言語、思考、記憶のパターンの組織化の間には平行関係が存在するという仮定 (Main & Goldwyn, 1984) から、乳幼児における、回避型、安定型、アンビバレント（抵抗）型、無秩序型 (disorganized) (Main & Solomon, 1990)⁹⁾ に対応する成人の愛着スタイルが、特定の面接手続きを通して見えてくると考えたのである。彼女らは、AAI の手続きを通して、具体的には、幼児期における父母との愛着関係の記憶、過去の愛着関係から現在の対人関係への影響、自分の愛着関係一般に対する態度等の想起を求め、その内容や内容の一貫性あるいは面接に対する構え等を把握することによって、成人の愛着表象を、愛着軽視（拒絶）型 (dismissing or disoriented)、自律型 (autonomous)、とらわれ型 (preoccupied) の3類型、場合によっては未解決型 (unresolved) (Ainsworth & Eichberg, 1991; etc.) を含めて4類型に分類することを可能にした¹⁰⁾。

愛着軽視（拒絶）型とは、自分の人生における愛着の重要性や影響力を低く評価するタイプで、乳幼児における回避型に対応するものとされる。この型の個人は、表面的には親を理想化し、ポジティブに評価するものの、親との個々の相互作用やエピソードを具体的な形ではほとんど言語化しないといった顕著な特徴を示す。自律型とは、愛着関係が自分の人生や現在のパーソナリティに対して持つ意味を深く理解しているタイプであり、乳幼児における安定型に対応するものとされる。この型の個人は、自分の愛着の歴史を、正負両面併せて、整合一貫した形で語る事が可能である。とらわれ型とは、自分の愛着の歴史を首尾一貫した形で語る事ができない（語る内容に矛盾が認められる）上、自分の過去、特に親が過去に自分に対して取った態度等に関していまだに強いこだわりを持っている（深くとらわれている）タイプであり、乳幼児のアンビバレント型に対応するものとされる。この型の個人は、親に対する自身の現在の見方を示す時、激しい怒りを示すことがある。さらに、未解決型とは、過去の外傷体験や愛着対象の喪失体験を有し、それに対していまだに葛藤した感情を抱いている、あるいは喪 (mourning) の過程から抜け出していないタイプであり、乳幼児における無秩序型に対応するものと

される (Main & Hesse, 1990 ; Ainsworth & Eichberg, 1991)。この型の個人の語りには、時に非現実な内容が入り交じる (例えば、死んでしまった対象がまだ生きているかのように話す) ことがある。

この Main 等による AAI の開発以来、愛着研究の枠内での世代間伝達研究は、基本的に、AAI における親の愛着表象 (内的作業モデル) の分類と SSP における子の愛着パターンの分類の間にはどのような対応性が見られるか (すなわち、AAI によって愛着軽視、自律、とらわれ、未解決の各タイプに分類される母親が、順に、SSP において回避、安定、アンビバレント、無秩序の愛着行動を示す子を、どれだけの確率で有するか) という問題の解明を企図している¹¹⁾¹²⁾。

例えば、AAI、SSP とも各 4 分類で、その間の一致率を算出した Ward et al. (1989) はその値が 69% に、Levine et al. (1989) は 87.5% に、また Levine et al. (1991) は 62% になるということをそれぞれ見出している。また、AAI における未解決型、および SSP における無秩序型を除く、各 3 分類で、母親の内的表象と子の愛着行動との関連性を見た Fonagy et al. (1991 a) は両者の間に 66% の一致が、Ainsworth & Eichberg (1991) は 80% の一致が見られたとしている。さらに、AAI の改作版を用いて母親の内的表象を安定 (愛着重視) と不安定 (愛着軽視) とに分けた Grossmann et al. (1988) は、それと子の SSP における愛着行動の安定、不安定との間に 80% の一致が見られたと報告している¹³⁾。

この他に、子の SSP における無秩序型の愛着行動と、母親の未解決型の愛着表象との関連性にのみ焦点を当てた研究も存在する。Ainsworth & Eichberg (1991) は、近親者を喪失する体験を有し、しかもそれを精神的にいまだに解決していない、いわゆる未解決型の母親 (10 人) の子が、すべて SSP において無秩序型の愛着パターンを示すことを見出している。(それに対して、喪失体験を有するものの精神的にそれを乗り越えていると思われる、解決型の母親 20 人の中に無秩序型の子を持つ母親は 2 人のみであった。) また、Main & Hesse (1990) は、何らかの喪失体験を有する母親を、精神的に解決している程度によって 3 群に分けたところ、最も解決がなされている群では、無秩序型の子を持つ母親の比率が 16% であるのに対し、最も解決がなされていない群 (すなわち AAI で言えば未解決型) では、その比率が 91% にも上るということを見出している。

また少数だが、父親の愛着表象のタイプと、SSP にお

ける父子の愛着関係のタイプとの関連を見た研究もある。Main & Goldwyn (in press) によると、父親の AAI のタイプと子が SSP において父親に示す愛着行動のタイプの一致率は 69% (各 3 カテゴリー間の一致) であったという。また、Fonagy et al. (1991 b) は、一致率について具体的な数字を上げていないが、父子それぞれの愛着タイプの関連は有意で、しかもその関連は母子の愛着関係におけるそれとある程度独立に把握できる、つまり子のそれぞれの親との関係の質はそれぞれの親の愛着表象によってかなり独立に規定されるということを示唆している。

実のところ、上で見た研究の間には、世代間伝達率の算出方法 (親子各何カテゴリー間の一致を問題にするか)、サンプルの性質¹⁴⁾ あるいは AAI および SSP の実施時期¹⁵⁾ などにかかなりのばらつきが認められることも確かであり、その意味で、現時点で、安易な結論づけをすることはできないが、少なくとも、これらの研究は、親の現在の愛着表象と子の愛着パターンとの間に、ある特異的な関連性が存在するという、および何らかの要素が確実に親から子へと伝達されているということを強く示唆する。それでは、いったいどのような要素がいかなる過程を経て伝達されるというのであろうか。次章では、そうした世代間伝達のメカニズムに関して考究することにした。

VI. 愛着の世代間伝達のメカニズム

親の愛着に関する内的作業モデルは、当然のことながら、親の子に対する具体的な関わりを介して、子の愛着行動へと影響を及ぼす。そうだとすれば、親の愛着表象と、親の子に対する具体的な関わりとの間にどのような特異的な関連性があるのか、そしてまたある特徴を備えた関わりの様式が、なぜ子に、親と近似した愛着スタイルを身につけさせることになるのかということ問う必要があるだろう。その問いに答えることができなければ、基本的に、世代間伝達のメカニズムは解かれなままである。以下では、まず、親の愛着表象と親の具体的な関わりとの関連性を示した 2 つの研究について見ることにする。

Haft & Slade (1989) の研究は、14 母子と小サンプルながら、自律型の母親が、乳児の情動に対して適切にしかも幅広く調律 (attune) できる (乳児の情動に対して自らの解釈を押しついたり、それを無視したりすることなく、純粹に乳児と情動体験を共有できる) のに対し、

愛着軽視型の母親は乳児のネガティブな情動にほとんど調律せず、またとらわれ型の母親はポジティブ、ネガティブどちらの情動に対しても行き当たりばったりの調律をすることを見出している。そして、愛着軽視型、とらわれ型いずれのタイプにしても、愛着に関して不安定な表象モデルを有する（自らが過去その親から適切に応じてもらえなかった）母親は、それを脅かすような（自ら過去の不遇な経験を喚起するような）乳児の情動には誤った調律しかできないことを示唆している。

また、Crowell & Feldman (1988) は、家庭や実験室における子との相互作用において、自律型の表象を有する母親は、子により支持的で子の学習や自己発見を促す働きかけを多くするのに対し、愛着軽視型の母親は子に統制的であったり命令的であることが、またとらわれ型の母親は子に対して一貫しない方法で関わり、子を混乱させやすいことが、それぞれ多いという結果を提示している。彼らは、また、そうした母親に養育される子どもの行動特徴についても分析している。それによれば、自律型の母を持つ子の行動はより愛情に満ちたものであるのに対し、愛着軽視型の母を持つ子の行動は、抑制的で不安に満ち、母に対し冷めた態度をとりやすいという。また、とらわれ型の母を持つ子の行動は、従順でなかったり、怒りやすかったり、親に対して多く統制的であったりするという。Crowell 等は、こうした母子の相互作用場面の観察データを基に判別分析を行ったところ、母親の愛着表象の分類の93%までが判別可能だったとしている。

Haft & Slade の研究と Crowell & Feldman の研究は、母親の養育行動の同じ側面を問題にしている訳ではないが、得ている結果には高い共通性が認められる。それは、自律型の母親の関わりが子自身の欲求に焦点化した関わりであること、愛着軽視型の母親の関わりが母親自らの欲求や思考を中核にしたあくまで選択的な関わりであること、とらわれ型の母親の関わりが、予測のつきにくい一貫性を欠いた関わりであるということである。

Main et al. (1985) や Bowlby (1973) によれば、乳児の愛着に関連するシグナルは潜在意識的に親の愛着に関連する記憶、すなわち内的作業モデルを活性化させる。したがって、親の子に対する関わりは、必然的に、親に内在する作業モデルの影響を強く受けることになるという。過去、自分に何かよくないことが生じた時に、自分がどのように感じたか、その時親は自分を慰めるためにどのように応じてくれたか（あるいは応じてくれるべきであったか）ということに対して、現在、防衛的になら

ずに容易にアクセスすることのできる親（すなわち安定した内的作業モデルを有する親）は、上記の研究で見たようにあくまで子ども自身の欲求に焦点化し、子が送る困惑の信号に対して共感的に反応することができる。あるいは子が送るいかなる愛着の信号に対しても幅広く適切に応答することができる（信号の性質によって子を受容したりしなかったりすることがない）。その結果、子も自由に自分の心的状態を適切な情動を介して表出することができるようになり、状況に関わりなく親に対して援助を求めていくことが可能になる（愛着対象への近接可能性や愛着対象の情緒的応答性に対してポジティブなモデルを構成し、愛着行動が安定する）(Grossmann et al., 1988)。それに対して、愛着軽視（拒絶）型のモデルを有する親は、自分の過去の不快な記憶（困惑を表出したにも関わらず拒絶されたり、適切に応じてもらえなかったりした記憶）を活性化させるような乳児の困惑信号（泣き等）をあえて知覚から排除するようにふるまう（上の研究で見たように、自らの不快を避けるために、子の愛着行動に対してあくまで選択的にしか反応しない）(Grossmann et al., 1988 ; Bretherton, 1990a ; Grossmann & Grossmann, 1991)。その結果、乳児は自分の困惑時に愛着対象に近接し得る、あるいは愛着対象から情緒的に応答してもらえると確信を抱くことができず、泣き等の愛着信号の表出を最小限に抑え込むことによって逆に安定を保とうとする（自分が愛着信号を送れば送るほど親は離れていくので、逆にそうした表出行動を極力抑え込むことによって、すなわち回避型の行動パターンをとることによって、親との間に、ある一定の距離関係を維持しようとする）(Main & Hesse, 1990)。また、とらわれ型のモデルを有する親は、自分の過去について統合的な見解をいまだ持つことができないために、乳児の送るシグナルから、様々な、時には相矛盾するような記憶を活性化し、上述した研究が示すように、子に対して予測のつきにくい非一貫的な関わりをしてしまう。その結果、乳児は、その本質的に予測のつきにくい状況を自らの力で統制しようとして、愛着信号を最大化し、絶えず親の注意を何とか自分に引こうと試みる(Main & Hesse, 1990)。つまり、とらわれ型の親においては、愛着軽視型の親のように一貫して乳児のネガティブな情動を拒絶することはなく、非一貫的ではあっても、時々適切に応じてくれるだけに、子はそれを執拗に求めて親に対して過度に用心深い(hypervigilant)態度(アンビバレント型乳児の典型的な行動特徴とされる)で接することになるという訳である。

さらに、Haft & SladeやCrowell & Feldmanの研究では問題にされていないが、親の未解決型の愛着表象と子の無秩序型の愛着行動との関連性を考究するならば以下のようなになるかも知れない。Main & Hesse (1990)によれば、未解決型の母親は、ある明確にそれとわかる事象（例えば乳児の泣き等）によってではなく、（例えば過去の写真等に喚起された）自身の外傷体験の記憶やそれに関する思考にとりつかれることによって、突然発声や行動の調子を変えたり、あるいはパニックに陥ったりする。時に未解決型の親は、子どもの示す何らかの行動に対して、過去の外傷体験を想起し、ひどくおびえてしまう。そうした変調は、乳児の目には、いかなる客観的な事象とも結びつかない（随伴しない）、きわめて不可解なものとなり、結果的に乳児はひどい恐怖に襲われる。本来、恐怖や不安を察した時の安全基地が愛着対象ということになるが、こうした状況では、その逃げ場となるべき基地こそが、恐怖の源でもある訳であり、その意味で乳児は解決不可能な逆説的な問題に直面せざるを得ないことになる。Mainらによれば、回避型にしてもアンビバレント型にしても、子ども自身が愛着の表出を最小化したり最大化したりすることによって、自分や環境を自らの力で調節統制しようとする分だけ、組織化された愛着パターンと言えるのだという。しかし、こうした不可解な状況に置かれる乳児は、いかなるところにも解決の手だてを見出すことができず、あるいは自ら統制することができず（解消されるべき問題は客観的環境のどこにもなく親の記憶の中に存在する）、状況にただただ身を任せることになり、その結果、愛着行動を一貫した形で組織化する（organize）ことができなくなってしまう。すなわち、そこには組織化されない、無秩序な（disorganized）愛着のパターンが形成されてしまうという訳である（無秩序型の行動パターンに関しては補注9を参照されたい）。

以上、親の愛着表象と子の愛着行動との間に想定される特異的な関連性に沿って、その世代間伝達のメカニズムを考究してきた訳であるが、現在のところ、こうした図式化は、あくまで推定されたものでしかない。Haft & SladeやCrowell & Feldmanの研究は、確かに親の愛着表象と具体的な養育行動との連関を、そして後者の研究に至っては、それらと子どもの行動特徴との連関まで明らかにしているものの、その因果の方向性については依然不明瞭なところが残る。それというのは、これらのデータの収集が同一時点で、しかも子どもがある程度成長してから行われているからである。すなわち、親の愛

着表象や親の養育行動が子ども自身の特徴や発達水準、あるいは親子を取り巻く養育環境（ストレスやサポート）の影響を受けて変化しているという可能性も否定できない（Van IJzendoorn, 1992）からである。親の愛着表象が養育行動のパターンの形成につながり、そしてそれが子の愛着行動の組織化を導くという因果の方向性を確定したいとすれば、サンプルを縦断的に追う（少なくとも親の愛着表象の測定は出産以前に行う）ような研究デザインが必要になってくるかも知れない。

Ⅶ. 総括と今後に残された課題

以上、精神分析、虐待研究、愛着研究と、それぞれの領域における世代間伝達研究の現状について概観してきた訳であるが、実のところそこで問題にされている世代間伝達の意味には微妙な差異が存在している。

精神分析や虐待研究で問題にされる世代間伝達とは、ほとんどの場合、親（第2世代）と子（第3世代）の間における世代間伝達ではなく、祖父母世代（第1世代）と親世代（第2世代）の間における世代間伝達である。つまり、そこでは、親が想起する過去の被養育経験（第1世代の第2世代に対する関わり）と親の子に対する現在の関わり（第2世代の第3世代に対する関わり）の関係が研究の焦点になっている。（例えば、虐待の世代間伝達として報告されているのは、第1世代である親から第2世代である自分が虐待を受けたということの記憶と、第2世代である自分が第3世代である自分の子を虐待したという事実との関連性である。）それに対して、愛着研究で問題にされる世代間伝達とは、あくまで親（第2世代）の愛着表象と子（第3世代）の愛着行動との関連性である。

無論、AAIを親自らの被養育経験（第1世代の第2世代への関わり）の想起と考え、SSPにおける子の愛着行動のパターンを親（第2世代）と子（第3世代）の関係性の特徴を反映するものと把握するならば、愛着研究が問題にする世代間伝達も、精神分析や虐待研究におけるそれと同じことになろう¹⁶。しかし、そうした見方をしてしまうと、実のところ愛着研究の枠内における世代間伝達研究の持つ意味が著しく弱まってしまうように思われる。それというのは、こうした研究の意味は、親のデータ（AAI）と子のデータ（SSP）という本質的に別個の2つのデータを直接対応づけるということを通じて世代間伝達の問題を議論していることだと思われるからである。繰り返しになるが、精神分析や虐待研究で問題にされる世代間伝達とは、親が“想起する限りの”自分

の過去の被養育経験（前世代の関係の質）と親の子に対する現在の関わりとの関連性であり、結局、そこでのデータの源は基本的に親一人なのである。前世代の関係性の評価を親自身の回想に依存している以上、そこで明らかにされる世代間伝達とは、推定されたものでしかない。それに対して、愛着の世代間伝達を扱う研究は、基本的に、別個のデータ源から得られた、しかもいずれも今現在の要素間の関連性を明らかにしているという意味で、一種の事実焦点を当てていると言うことができるかも知れない。世代間伝達研究が愛着研究に至って最も大きく変化したのはこの点なのではないだろうか。現在、愛着研究の中では、SSPにおける乳児の愛着パターンが、あくまで乳児自身の内的作業モデルの反映である（Main et al., 1985 ; Zeanah & Zeanah, 1989 ; Bretherton, 1990a）と、また、AAIによって取り出される母親側の情報が、（母親とその親の過去の関係性の反映であるという以上に）母親自身の現在の内的作業モデルの反映であると見なされる。そして、親の内的作業モデルの質が、子の内的作業モデルの形成をどれだけ正確に予測し得るかということ、すなわち“内的作業モデルの世代間伝達”（Bretherton, 1990b）が現実にとどれだけ生じ得るかということが、最も問われる問題になっているのである。

この点に関連して是非とも言及しておくべきことがある。それは、愛着の世代間伝達を扱っている研究の多くが、想起される自らの被養育経験の質が否定的なものであるにも関わらず、現在安定した内的作業モデルを有し、自分の子に対して感受性豊かな対応ができる親の存在に特別な関心を払っているということである（Ricks, 1985 ; Grossmann et al., 1988）。（つまり、「想起される被養育経験の内容＝内的作業モデルの質」では必ずしもないということである。）近年の研究の流れは、従来の精神分析理論が強調してきた、過去が現在を規定するという単純な決定論的図式（幼児期における未解決の親子間葛藤が、自らが親になった際に再活性化され同様の親子関係が繰り返される）（Benedek, 1960 ; Sperting, 1968 ; etc.）の実証を図ろうというものではもはやなくなってきた。Grossmann et al. (1988) は、支持的な親を有し、外傷体験を持たない母親であれば、かなりの確率で愛着に関して良好なモデルを形成し、子との間に安定した愛着関係を持つことができるとする一方、不幸な愛着経験を有する母親が現在の愛着関係に否定的影響を及ぼすモデルを持ち、過去の不幸を繰り返していく訳では必ずしもないことを示唆している。彼らは、崩壊し

た母子関係が伝達されるのは、母親が自分の過去を受容せず、愛着に関する情報に防衛的な姿勢をとり続けている場合だとしている。現在、こうした（第1世代と第2世代との間の）不連続性（被養育経験の内容に沿わない養育行動を施し得る）への着目を端緒に、多くの研究者が、現在の愛着の関係性を最も予測するのは、母親によって想起される記憶内容そのものというよりも、母親がどれだけ記憶や感情を正の面、負の面併せて統合できているか、愛着に関する情報に防衛的にならずに、どれだけ容易にアクセスできるかということ（Main et al., 1985 ; Grossmann et al., 1988 ; Zeanah & Zeanah, 1989 ; Bretherton, 1990a）、あるいは愛着に関していかにメタ認知能力や内省能力を働かせることができるかということ（Fonagy et al., 1991b ; Main, 1991）なのではないかという見解をとっている。過去に何があったかということの記憶（内的作業モデルの内容的側面：Crittenden, 1990）よりも、それをどう解釈し、統合しているかという内的表象モデルの構造的整合一貫性（coherence / consistency）（Main, 1991）が現在の関係性を規定する、より本質的な要因とされ始めているのである¹⁷。Bowlby (1973, 1982) は、それ以前の対象関係論同様、子ども時代の実際の諸経験が自他の表象、内的作業モデルにかなりのところ正確に反映され、結果的に、現実の愛着関係が繰り返されていく可能性が強いと仮定していたが、最近の研究者は、愛着に関するモデルの形成にもっと様々な要因が介在することを想定し、その分、現実の被養育経験と内的作業モデルのリンクを相対的により緩いものと見なすようになっている。

確かに、実際に自らが過去に経験した被養育経験が、世代を超えて、現在の自分の子に対する養育を規定する確率は相対的に高いと言えるかも知れない。しかし、それはあくまで確率が高いということであり、決して必然的なものではないことを銘記しておく必要がある。愛着に関する内的作業モデルは、単なる過去の被養育経験の写しではない。その、経験を単にそのままの形で取り込んだものではないというところに、不連続性の可能性が存在し、“ある過程”を経て、表象モデルの力動的統合ができれば、関係性の崩壊は繰り返されないということである。今後明らかにされるべきことは、その“ある過程”とは何か、どのような状況で、そうしたモデルの統合が生じ得るのかという問題であろう。これに関して、Ricks (1985), Main et al. (1985), Egeland et al. (1988), Fraiberg et al. (1975), Bretherton (1990a) 等の学者が、ある時点で親以外との支持的で暖かい関係を享受することや初期のモデルとは根本的に異なる際立った情緒的体

験をすること等の重要性を指摘している。

ただ、これについては次のことも考慮しておく必要があるだろう。Bowlby (1988) は、人生早期に不遇な環境の下で出発した個人が、その後の生涯発達過程においても不利な環境条件にさらされる可能性が相対的に高いということ（“転がる雪玉”のように困難な状況が次々と現出して次第次第に膨れ上がる）を指摘している。例えば、幼い頃に温かい養育を享受し得なかった子が、対人スキルの欠落から、学校等の集団の中でも周辺に追いやられ、非行に走り、そしてその中で、非支持的な異性との関係を持ち、早期に妊娠、出産、社会的サポートを受けられないまま、また貧困等も重なり、養育状況の中で孤立、困惑し、結果的に子に対して十分なケアを施し得なくなるといような、社会的悪循環が存在しているということである。ただし、こうした悪しき袋小路的状况は、純粹に“社会的な”悪循環としてのみ理解できるものではない。Bowlbyによれば、そうした状況は、個人が自分の周りに“自ら”作り上げたものでもある。つまり、一旦早期に非組織的で不安定なモデルを形成してしまうと、それにしがたって外界を認知し、そして外界に働きかけることによって、自ら予測する状況を、それがたとえ自らに不利なものであっても、現に招来してしまう傾向が人間にはある程度備わっているということである。複数の研究が、被虐待経験者が虐待的な配偶者を選んだり、回避的な愛着パターンを持つ者が友人関係においても一貫して回避的であったりする確率が相対的に高いということを見出している（DeLozier, 1982 ; Crittenden, 1985 ; Sroufe & Fleeson, 1986 ; Zeanah, & Zeanah, 1989 ; Widom, 1989 ; Sroufe, 1990）¹⁸⁾。そうした個人は、自分にとって（あるいは自分の心内化したモデルにとって）予測しやすい、より親近性の高い環境を維持すべく、（自分のモデルからすると異質な）ポジティブな関係を自分の周囲から排除していることになる。

つまり、ある状況が、表象モデルに力動的な変化をもたらし得るとは言っても、自らそうした状況の現出を妨げるように外的な対人環境を操作する傾向がある以上、モデルの変化はそれほど容易には生じないということである。それだけに、表象モデルに劇的な変化をもたらす対人的状況や情緒的体験というのは精神療法における“徹底操作”（working through）¹⁹⁾に相当するような持続的で安定した、際立って強力なものであると想定せざるを得ない。この日常過程における“徹底操作”がいかにして生じ得るのかは臨床的にもきわめて重要だと考えられるが、現時点では、具体的にどの時期の誰との、ど

のような、どの程度の関係が、あるいはいかなる状況の組み合わせが、こうした劇的な変化に通じるのか、ほとんど解明されていないのである。（逆に良好な被養育経験を有しながら、現在自分の子に対して、適切な養育を施し得ない親の存在も明らかにされているが、なぜこうした事態が生じ得るのかということもまた解明されていない。）

いずれにしても、これまでは、内的作業モデルの形成過程において、被養育経験の果たす役割だけが強調され、（本来関与することが想定される）他の要因の意味がほとんど問題にされてこなかったと言える。親の社会化といった観点からは、既に、Belsky (1984) や Meyer (1988) によって、複数の要因を組み入れた、養育行動の規定因に関する多因子モデルが提示されている。彼らは、親の生育歴も含めた心理学的リソース、子の特徴、養育環境に潜在するストレスやサポートといった社会的要因等、複数の要因が養育行動の質の決定に与ると仮定し、それぞれの要因の予測説明力を考慮するに至っている。今後、こうした知見と、世代間伝達および内的作業モデルに関する知見とを、有機的に統合していく方向性が望まれる。早期に経験する被養育経験だけではない複数の要因を組み込んで、表象モデルの構造がいかん規定されるか、どのような力動的変化があり得るのか、そしてそれは現実の養育にどのように及ぶのか等の問題を包括的に扱い得る、新しい理論的枠組みを構築していく必要があるだろう。

また、上記のこととも密接に関係するが、内的作業モデル形成にとって重要な時期をいつと捉えるかということに関する問題も残されている。Bowlby の理論においては乳幼児期の絶対的な重要性が強調されていた。確かに、母子関係、親子関係が緊密な乳幼児期の意味はある程度認めることができるにせよ、従来理論は、それ以後の他の発達段階が愛着の表象モデルにどのような意味を有するのかをほとんど明らかにしていないと言える。Main et al. (1985) や Ricks (1985) は、思春期、青年期の形式的思考の発達がモデルの再構成の機会を与え得ることを示唆しているが、無論これを仮定するだけでは十分な説明とは言えない（Bretherton, 1990a）。Lebovici (1988) は、母子相互作用をより正確に理解するためには、母親に内在化された、乳幼児期の自身の親との同一化に基礎を持つ“幻想上の赤ん坊”（fantasmatic baby）、少女期から出産に至るまでの様々な想像を基にする“想像上の赤ん坊”（imaginary baby）、さらに実際に持った“現実の赤ん坊”（actual baby）、すべてを考慮

しなくてはならないとし、その母親の内的表象の形成に対する、乳幼児期以後の重要性を示唆している。他にも、Winnicott (1968), Fogel et al. (1986), 小嶋 (1989) 等が、乳幼児期の親との実体験のみならず、親が他の子に接する場面を見たり、自分自身、弟妹などの年少の子の世話をしたりするといった、乳幼児期以後の様々な養護の体験に独自の意味を仮定している。今後、こうした示唆を踏まえ、乳幼児期以後の発達過程が、内的作業モデルの構造化や確立にいかなる働きを有するのかを明らかにしていく必要もあるだろう。

最後にもう1点、現時点では、ほとんど手つかずのまま残されている（そしてまだあまり注目されてもいない）重要な課題を指摘しておくことにしたい。それは、なぜ同一の母親が、時に、自分の複数の子に対して全く異なる愛着パターンを示すというようなことが起こり得るのかという問題である。Sroufe et al. (1985) は、子に対して性的誘惑行動をとる母親に関する研究の中で、そうした母親が自分の他の子に対しては全く異質の関わりを示すケースがむしろ一般的であることを報告している。こうした母親には過去、自分の親によって性的に虐待された経験を持つ者が有意に多かったが、もし、母親の表象モデルがこういった過去の反映であるとする、なぜ、すべての子どもにではなく、選択的に特定の1人の子どもだけにそれが及ぶのかが必ずしも整合的に説明されない。また、Goldberg et al. (1986) や Stern (1971) は、双生児それぞれに対して安定と不安定の異種の愛着を形成する（双子それぞれの愛着行動を全く異質な方向へと導く）母親の存在を明らかにしているが、これもまた、過去に基盤を置く単一のモデルが、現在の多くの対人関係に様に及び、それらの質を規定するという見方だけでは説明されないだろう。こうした知見は、内的作業モデルが個人の中に単一不変のものとして存在するものでは必ずしもないこと、むしろ時に（あるいは本質的に）複数併存し、それぞれが異種の機能を果たし得るということを示唆する。そして、筆者が上で強調した視点、すなわち、被養育経験を基とする表象モデルが、その時々の実現の状況（子の行動特徴、母親の心身状態、ソーシャル・サポート、環境に潜むストレス等）に接してどのように変化し、再体制化されるかを明らかにする視点が必要である（Zeanah & Barton, 1989）ということ再度認識させる。（「内的作業モデル→現時の対人関係、自身の子との愛着関係」という矢印の方向性ばかりではなく、時に、その逆の方向性も問題にする必要がある。）

George & Solomon (1989) や Bretherton et al. (1989) は、従来のように、愛着に関する“一般的な”表象モデルではなく、より“個別の”、特定の子に関する表象モデルを研究対象にする必要性を説いているが、これもまさにこうした問題に対する1つの解決策と解することができるだろう。確かに、特定の子に対する親としての愛着表象を問題にしていけば、それとの関連で親の子に対する具体的な関わりを精緻に検討することが可能になる。双子それぞれに対する母親の接し方が全く異質であったとしても、個々の子に対して別個の愛着の表象モデルが形成されていると考えれば、論理的に全く不都合な部分はなくなくなる訳である。しかしながら、そうした特定の子に対する個別の作業モデルはどのような過程を経て形成されるのだろうか。被養育経験あるいはその他の対人関係の経験を基礎とする、一般的な愛着表象が、どのようなメカニズムを経て、個別の作業モデルに“分岐”していくのだろうか。特に、愛着に関する一般的な作業モデルが、時に、全く異質の個別の作業モデルの形成に通じるのはなぜなのだろうか。現在のところ、これらの疑問に対する明確な答が用意されているとは言えないのである。

今後に残された課題は、無論、上記のようなものに止まる訳ではない。この他にも様々な課題が想定される。例えば、現在ほとんどの研究が、AAIという方法を基盤にして愛着の世代間伝達にアプローチしているが、この方法はどれだけの妥当性、信頼性を備えたものと言えるのだろうか。Crittenden (1990) は、AAIが深く臨床的に成人の愛着表象を分析し得るという意味で、その大きな可能性を認めながらも、そのスコアリングやカテゴリー化のシステムには再考の余地があるとしている²⁰。また、愛着の世代間伝達研究が、現在のところ、米国、英国、ドイツといった限られた文化圏でしか行われていないという点も気にかかる点である。現在までに得られている知見の普遍的妥当性を検討するという意味においても、また新たに文化的特異性を見出していくという意味においても、今後、日本²¹を含む他文化圏における、この領域の研究が重要性を帯びてくると考えられる。SSPに関する愛着研究が比較文化的視点（Grossmann & Grossmann, 1990 ; Takahashi, 1990）によって大幅な進展を見せたように、この世代間伝達の研究も、欧米とは異なる養育文化の中で行われることによって、新たな展開が期待されるのである。

愛着の世代間伝達に関する研究はいまだ搖籃期を出て

いないと言うべきだろう。現在までに得られている知見は、確かに親の愛着表象と子の愛着行動との間に特異的な関連性があることを示唆しているが、それが本当の意味での世代間伝達と言い得るのか、あるいはその基底に存在するメカニズムがいかなるものかということはいまだ十分には明らかにされていないのである。研究者は、これまでの知見を既に確定されたものと錯覚してはならない。この研究領域における知見の蓄積はむしろこれから多くなされるべきものなのである。筆者が指摘したいくつかの疑問点を含め、今後に残された課題が多いということを強調した上で、この論を結ぶことにする。

補注

- 1) この他にも、祖父母世代と父母世代の、より具体的な養育行動、養育態度にどれだけの一致が見られるかということを中心に研究（詳細は、Van IJzendoorn (1992)を参照されたい）、各種の精神病理（例えば、感情障害、人格障害、アルコール中毒等）を生む親子の関係性にどれだけ世代間伝達が認められるかという問題を扱った研究（Andrews et al. 1990 ; Orford & Velleman, 1991 ; etc.）、さらに夫婦関係の不和や崩壊（離婚）の世代間伝達に焦点を当てた研究（Greenberg & Nay, 1982 ; Kulmuss, 1984 ; etc.）など、実に様々な研究が行われている。
- 2) 妊娠や出産といった女性の生殖機能に対する拒否感情を問題にした研究の中には、こうしたHorneyやDeutschらの仮定を部分的に実証するような研究もある。Kline (1955), Markham (1961), Melges (1968), Nilsson & Almgren (1970)等は、出産後に著しい精神的混乱や子に対する拒否感情を示した母親の生育歴を辿り、そうした母親が、自分の母親との間で不満足な関係あるいは極度に依存的な関係しか経験していない確率が大きいことを見出している。また、妊娠障害（Rothman & Kaplan, 1972）、自発的中絶（Mann, 1972）、異常分娩（Kapp et al., 1963 ; Almgren, 1972）等の産婦人科的症候を示す母親に、葛藤に満ちた母子関係の歴史を持つ者が多いことを示した研究もある。さらに、Uddenberg (1974)は、娘の妊娠から出産後にかけて、85組の母娘両者に体系的な面接調査を行い、妊娠中または出産後に精神的混乱を示した娘が、乳幼児期から青年期にかけて、親との接触の度が低かったこと、また心理テストの上でも、妊娠、出産、女性性や母性に対する葛藤が高い母親の娘が、母親と同様の葛藤を示しやすいことなどを見出している。彼女は、子が親から不適切な適応様式を内在化する結果、適応上の困難が世代から世代へと伝達される可能性がある」と結論している。
- 3) 最近の記憶理論の観点から言うと、このBuxbaumの仮定はきわめて興味深い。精神分析における内的対象やBowlbyにおける内的作業モデルは、基本的に、愛着対象に対する抽象一般化された期待や確信を中核とするという意味で、いわゆる宣言的（命題的）記憶からなるものと考えられる。それに対して、Buxbaumが問題にする無意識的身体的記憶とは、命題的に抽象化されたものではない、あくまで動作レベルの記憶という意味で、手続き的記憶あるいは知覚的プライミングからなるものと考えられる。Tulving (1991), Squire (1987), 太田 (1991)は、意識に上ることは決してないが、無数の知覚レベル、行動レベルの諸経験が生のみで記憶され（潜在記憶）、後の行動に影響を及ぼす可能性があることを主張しているが、早期に施された具体的養育行動等の記憶はまさにこれに相当するのかもしれない

い。乳幼児期に何をどうされたかということに関する具体的な記憶を顕在化させることはおそらく困難であろう。しかし、それはほぼ確実に（おそらくは神経解剖学的事実として）人の中に生きていて、実のところ、その人のその後の行動をかなり左右しているのかも知れない。抽象一般化された宣言的（命題的）記憶としての愛着に関する期待や確信（内的作業モデル）だけが、親としての養育行動を導く訳ではなく、まさに無数の行動レベルの記憶が、ある養育の状況に接して直接的無媒介的に喚起され、親の養育行動を導く（自身が過去に受けたのと同様の行動を繰り返させる）という可能性もあるということを度外視することはできないだろう。少なくとも最近のプライミング研究の成果はそのことを強く示唆している。

- 4) Friedrichらの概観にはないが、1970年代初頭に、Oliver & Taylor (1971)によってなされた、虐待が頻発する家族、5世代にわたるケース・ヒストリーの報告は着目に値する。彼らは、5世代49個人に焦点を当て、そのほとんどが幼児期に身体的虐待、遺棄、無視等の過酷な経験にさらされ、そして自らもそうした行為を自分の子に対して繰り返し行っていたと記述している。
- 5) 紙面の都合上詳述できないが、虐待の世代間伝達を議論するにしても、虐待された子の行動特性や対人関係の持ち方等を明らかにするという側面からそれを問題にした研究が数多く存在する（Reidy, 1977 ; Kinard, 1980 ; Hoffman-Plotkin & Twentymann, 1985 ; Main & George, 1985 ; Howes & Eldredge, 1985 ; Klimes-Dougan & Kistner, 1990 ; etc.）。これらの研究は、乳幼児期から思春期に至る被虐待児の、攻撃性、共感性の欠如、情緒的不適応等の、際立った行動特性を明らかにし、それらが虐待する親の側の行動特性ときわめて近似するというところを見出している。
- 6) Zeanah & Anders (1987), Pipp (1990)等は、加齢に伴い作業モデルの変化が生じにくくなる一つの要因として、作業モデルの構成が人生早期に感覚運動的なものから出発し、徐々に言語的なものに移行していくという点を重視している。つまり、言語的表象が優勢になるにしたがい、人は、感覚運動的に符号化してある記憶に、意識的に近接することが困難になるため、結果的に早期の感覚運動優位の表象モデルを比較的そのままの形で保持することになり、無意識的にその影響を強く受け続けるというのである。
- 7) Lyons-Ruth et al. (1984)は、SSPにおいて愛着が不安定な子ども群の母親の方が、安定群の母親に比して、自らが育った家族の精神的健康度が低かったとする一方で、その家族内の葛藤の度も低かったと報告する傾向が強いことを見出している。この結果に対して、彼らは、愛着不安定群の母親が、親や自分の過去を理想化する傾向が強く、防衛性が高いと解釈している。
- 8) Ricks (1985)は、Epstein (1980)の自己理論に基礎を置く質問紙を用いて、母親の自己概念や自身の親との関係、生育歴に関する情報を収集、SSPにおける子の愛着が安定している場合、母親の、自分の過去に関する想起がよりポジティブで、しかも自己評価も高いという傾向を見出している。特に、自分の母親から受容されたか否かの想起に関して、愛着安定群と不安定群の間に最も顕著な差異が現れたという。
- 9) 無秩序型（disorganized）という愛着分類は、既存の回避、安定、アンビバレントのいずれにも分類不可能な愛着パターンに対して当てられた術語である。Main & Solomon (1990)によれば、その際立った特徴は、突然のすくみ（freezing）、顔をそむけた状態での親への近接、ストレンジャーにおびえた際に親から離れ壁に寄りかかる行動、再会の際に親を迎えてすり寄ったかと思うとすぐに床に倒れ込むような行動など、実に不可解な行動パターン、普通は両立しないような行動システムが同時に活性化されるような動きにあると言う。
- 10) AAIのデータは、各タイプに分類される以前に、最初まず以下

- の8つの下位尺度にしたがって評定される。1) (父母それぞれとの) 情愛豊かな関係 2) (父母それぞれとの) 拒絶の関係 3) (父母それぞれとの関係における) 役割の逆転 (role-reversal) 4) (父母それぞれとの関係の) 理想化 5) (父母それぞれに対する) 怒り 6) (父母それぞれに対する) 侮蔑 (derogation) 7) 想起困難, 想起拒絶の度合い 8) 面接内容の全体的な整合一貫性。
- 11) 愛着研究の枠内における世代間伝達研究は、主に AAI と SSP の対応性を検討するという形で進行しているが、これ以外のデザインに依拠する研究が全くないという訳ではない。AAI, SSP の両者に用いていないものの、母親の内的表象に焦点を当て、世代間伝達の問題にアプローチしている研究がいくつか存在する。Biringen (1990) は、Epstein (1983) の自己理論に依拠したスケールを用いて、自分の親の受容性に関する想起の度合いを高低2群に、また観察された母子相互作用の調和性を同じく高低2群にそれぞれ分けたところ、両者の間に84%の一致が見られたと報告している。また、Cox et al. (1985) は従来の多くの研究において、母親の生育歴の評価がきわめて大ざっぱになされている (例えば、安定しているか否かだけの評価) ことと、生育歴の聴取が子の誕生後かなり時間を経てから行われていることを批判、母親の生育歴に関する多側面の情報の聴取を子の誕生前に行い、それと観察、面接両方から得た母親の養育に対する適応との関連を見ている。彼らは重回帰分析を用いて、母親の養育に対する適応が、自身の母親の接し方が侵害的でなかったという想起によって最も説明されることを見出している。さらに、Sroufe et al. (1985) は、子に対して身体的あるいは性的に誘惑的な行動をとる母親が、過去に、自身同様の世代境界の崩壊した家庭 (夫婦の連合が崩れ、ある親と子の関係が異常に緊密になり、時に子が親の配偶者あるいは性的パートナーの役割を担わされているような家庭) で育ち、生育過程を通して、親が子を利用して自らの情緒的欲求を満たすことを暗黙裡に当然視してしまっている可能性が高いことを明らかにしている。彼らは内在化された関係様式あるいはその意味が新たな関係に持ち込まれていくと結論している。
- 12) 実のところ、AAI の創始者である Main は、1985年段階の研究 (Main et al., 1985) においてはまだ、SSP における子の愛着分類と AAI による母親の愛着表象の分類の対応性を、直接的には検討していない。この研究 (Main et al., 1985) から得られた知見は、SSP の再会場面で回避的な行動をとった子の母親が、自分の母親から拒絶された体験を語ったり、過去に関する想起に困難を示したり、自分の親を理想化したりすることが多いということであった。また、SSP における子の愛着行動と母親の AAI における面接内容を、それぞれ愛着の安定性という観点から一次元的な得点として表し、両者の相関をとったところ、.62の相関が得られたという (父親の愛着表象と子の SSP における愛着の安定性の相関も見ているが、その値は、.37と母子の場合よりは低めであった)。
- 13) Grossmann et al. (1988) は、基本的には、AAIの手続きをとっているものの、母親の愛着表象の分類に関しては独自の符号化体系を採用し、母親を、①肯定型、②非防衛型、③防衛・矛盾・理想化型、④抑圧型のいずれかに振り分けている。そして、さらに①②を併せ愛着重視型 (ポジティブなものであれ、ネガティブなものであれ、自分の愛着経験を防衛的にならずに語ろうとする)、③④を併せ愛着軽視型 (愛着経験に対して無関心であったり、それを極端に理想化して語ったりする) とし、それらと子の SSP における愛着の型、すなわち、安定愛着型 (B安定型)、不安定愛着型 (A回避型 + C抵抗型) との間の関連性を検討している。
- 14) Ward et al. (1989), Levine et al. (1989), Levine et al. (1991) の研究はいずれも、黒人あるいはラテン・アメリカ系低所得者層の、しかも10代の母親を研究対象にしているという意味で、他の研究に比してかなり特殊なサンプルを扱っていると言えるかも知れない。
- 15) こうした一連の研究は一律に AAI と SSP の関連を問題にしているが、それらをいつ測定しているかによって3つのタイプに分類することができる。1) SSP の測定時期が AAI の測定時期よりかなり先行するもの (SSP—乳幼児期, AAI—就学直前等) (Main & Goldwyn, in press; Grossmann et al., 1988; etc.)。2) 両者の測定がほぼ同時期に行われているもの (ともに子の乳幼児期に実施) (Ainsworth & Eichberg, 1991; Levine et al., 1989)。3) AAI の測定時期が SSP の測定時期よりも先行するもの (AAI の測定を母親の出産前妊娠中に行う) (Fonagy et al., 1991 a; Ward et al., 1989; Levine et al., 1991)。
- Maccoby & Martin (1983) や Sroufe (1985) は、子を実際に養育してしまうと、その影響を受けて親自身の生育歴の叙述や評価がかなり変化してしまう可能性があるということを指摘しているが、世代間伝達の因果関係を明確にするという意味からすれば、どの研究においても本来3)のデザインがとられて然るべきものと考えられる。厳密に言えば、1)や2)のデザインをとっている研究は、親の愛着表象が子の愛着パターンの形成に強く関与するという因果の方向性を必ずしも確定するものではないのである。
- 16) 精神分析や虐待研究の視点からすると、Ⅵ章で (愛着の世代間伝達のメカニズムを示唆する研究として) ふれた Haft & Slade (1989) や Crowell & Feldman (1988) の研究こそが同じ意味で世代間伝達を問題にしていると言えるかも知れない。確かに、これらの研究は、AAI をあくまで被養育経験の記憶の反映と捉えるならば、精神分析や虐待研究と同様、回想された前世代の関係性の質と、現世代の親の子どもに対する関わりとの関連性を問題にしていると言える訳である。
- 17) Fonagy et al. (1991 b) は、AAI の8つの下位尺度 (補注10を参照されたい) の中でも、特に面接内容の全体的な整合一貫性という下位尺度が、最も子の愛着の安定性を予測するとしている。
- 18) Sroufe (1990) は、愛着に関する縦断研究の中で、幼児期に不安定愛着型と測定された子と、安定愛着型と測定された子の、前青年期のサマーキャンプにおける行動の差異を明らかにしている。それによると、両者の顕著な差異は、教師やカウンセラーをサポートの資源として活用する能力の差とともに、教師やカウンセラーが実際に両者に対してとる関わり方の差であった。生育歴に関して何の先行情報も持たない教師が、不安定型愛着の子に対しては、まさにそうした子の親がその子に対して過去からとってきた関わり方のスタイルを示したというのである。また、両者は、友人の選択においても、明らかな差を示したという。不安定型愛着の子は、他者と親密になりにくいだけでなく、パートナーとしてやはり、回避型あるいはアンビバレント型の子を選択し、いじめっ子がいじめられっ子のどちらかの役割を固定的にとり続けたというのである。Sroufe は、これに関する興味深いエピソードとして、いつもいじめられっ子の役割をとり続けている子が、たまたまいじめっ子から無視された時に、当惑して、悲しげに「今日はどうしていじめようとしなくていいの?」と聞いたということを挙げている。おそらく、客観的立場から見れば、キャンプの中でも、不安定愛着の子どもたちは他者からのサポートをより必要としている。しかし、実際には、彼らは、サポートを求めない。あるいはサポートを必要としながら、そのことを表出できない。またサポートが与えられてもそれを容易に受け入れることができない。むしろ他者を困惑させ、怒らせ、サポートの資源を自分の周りから遠ざけてしまう行動をとる。(そして、こうした一連の行動をもって、対人関係に対する否定的な期待や確信を一層固定化してしまう。)
- 19) 徹底操作 (working through) とは、精神療法において、解釈に

統一を与え、解釈が引き起こす抵抗を克服していく過程を指して言う。換言するならば、クライアントに、抑圧されていた心的要素を受容させ、種々の防衛機制的支配から脱却させる心的操作であるとも言える。

- 20) AAIは、成人の愛着表象を、自律、愛着軽視、とらわれ、未解決といったタイプに分類する訳であるが、実のところ、その分類手続きは完全には公にされていない。
- 21) 確かに、日本国内ではまだ、内的作業モデルに焦点を当て、AAIとSSPの関連性を検討するという研究は行われていない。しかし、世代間伝達の問題に何らかの形で関係する研究は既にいくつか行われている。例えば、橋爪ら(1986)は、独自に開発した、PSPという投影法(秋山ら、1985)を28組の母と祖母(母の実母)に実施したところ、その内9組において、母が子に対してとる心理的關係パターンが、祖母が母の乳児期に母に対してとった心理的關係パターン(回顧的報告)に酷似していることを見出し、親子の關係性が生育過程を通して、世代から世代へと伝達される可能性があることを示唆している。また、遠藤ら(1991)は、母親に対する質問紙法を用いて、母親の被養育経験に対する評価と、現在の子どもに対する意識や養育態度に微弱ながら有意な連関があることを見出している。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Ainsworth, M. D. S. & Eichberg, C. G. 1991 Effects on infant-mother attachment of mother's unresolved loss of an attachment figure or other traumatic experience. In C. M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle*. New York: Routledge.
- 秋山俊夫・板井修一・小串武・山下文雄 1985 母親の子供に対する心理的距離の測定の試み 小児の精神と神経, 25, 27-37.
- Altemeier, W. A., O'Conner, S., Sherrod, K. B., et al. 1986 Outcome of abuse among pregnant low income women. *International Journal of Child Abuse and Neglect*, 10, 319-330.
- Andrews, B., Brown, G. W., & Creasey, L. 1990 Intergenerational links between psychiatric disorder in mothers and daughters: The role of parenting experiences. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 31, 1115-1129.
- Barahal, R. M., Waterman, J., & Martin, H. P. 1981 The social cognitive development of abused children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 49, 508-516.
- Belsky, J. 1984 The determinants of parenting: A process model. *Child Development*, 55, 83-96.
- Belsky, J. & Pensky, E. 1988 Developmental history, personality, and family relationships: Toward an emergent family system. In R. A. Hinde & J. Stevenson-Hinde (Eds.), *Relationships within families: Mutual influences*. Oxford: Clarendon Press.
- Benedek, T. 1959 Parenthood as a developmental phase: A contribution to the libido theory. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 7, 389-417.
- Benedek, T. 1960 The organization of the reproductive drive. *International Journal of Psychoanalysis*, 41, 1-15.
- Berger, M. & Kennedy, H. 1975 Pseudobackwardness in children. *Psychoanalytic Study of the Child*, 30, 279-306.
- Biringen, Z. 1990 Direct observation of maternal sensitivity and dyadic interactions in the home: Relations to maternal thinking. *Developmental psychology*, 26, 278-284.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss: Vol. 1, Attachment*. New York: Basic Books. (revised edition 1982)
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss: Vol. 2, Separation*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1979 *The making and breaking of affectional bonds*. London: Tavistock.
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and Loss: Vol. 3, Loss*. New York: Basic Books.
- Brazelton, T. B. & Cramer, B. G. 1990 *The earliest relationships: Parents, infants, and the drama of early attachment*. A Meylord Lawrence Book.
- Bretherton, I. 1987 New perspectives on attachment relations: Security, communications and internal working models. In J. Osofsky (Ed.), *Handbook of Infant Development*. (2nd ed.) New York: Wiley.
- Bretherton, I. 1990a Communication patterns, internal working models, and the intergenerational transmission of attachment relationships. *Infant Mental Health Journal*, 11, 237-252.
- Bretherton, I. 1990b Open communication and internal working models: Their role in the development of attachment relationships. In R. A. Thompson (Ed.), *Socioemotional Development*. University of Nebraska.
- Bretherton, I., Biringen, Z., Ridgeway, D., Maslin, C., & Sherman, M. 1989 Attachment: The parental perspective. *Infant Mental Health Journal*, 10, 203-221.
- Bundura, A., Ross, D. & Ross, S. A. 1961 Transmission of aggression through imitation of aggressive models. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 63, 575-582.
- Burgess, R. J. & Youngblade, L. 1988 Social incompetence and the intergenerational transmission of abusive parental behavior. In R. Gelles, G. Hotaling, D. Finkelhor, & M. Straus (Eds.), *New directions in family research*. Beverly Hills: Sage Publications.
- Buxbaum, E. 1983 Vulnerable mothers, vulnerable babies. In J. D. Call, Galenson, E. & Tyson, R. L. (Eds.), *Frontiers of infant psychiatry*. New York: Basic Books.
- Chodorow, N. 1978 *The reproduction of mothering: Psychoanalysis and the sociology of gender*. California: University of California Press.
- Cicchetti, D. & Aber, J. L. 1980 Abused children, abusive parents: An overstated case? *Harvard Educational Review*, 50, 244-250.
- Coleman, R. W., Kris, E., & Provence, S. 1953 Study of variations in early parental attitudes. *Psychoanalytic Study of the Child*, 8, 20-47.
- Conger, R., Burgess, R. & Barrett, C. 1979 Child abuse related to life change and perceptions of illness: Some preliminary findings. *Family Coordination*, 58, 73-77.
- Cox, M. J., Owen, M. T., Lewis, J. M., Riedel, C., ScafMciver, L., & Suster, A. 1985 Intergenerational influences on the parent-infant relationship in the transition to parenthood. *Journal of Family Issues*, 6, 543-564.
- Cramer, B. G. 1987 Objective and subjective aspects of parent-infant relations: An attempt at correlation between infant studies and clinical work. In J. Osofsky (Ed.), *Handbook of Infant Development*. (2nd ed.) New York: Wiley.
- Crittenden, P. M. 1990 Internal representational models of attachment relationships. *Infant Mental Health Journal*, 11, 259-277.

- Crittenden, P. M. 1985 Maltreated Infants : Vulnerability and resilience. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 26, 85-96.
- Crowell, J. A. & Feldman, S. S. 1988 Mother's internal models of relationships and children's behavioral and developmental status in mother-child interaction. *Child Development*, 59, 1273-1285.
- DeLozier, P. P. 1982 Attachment theory and child abuse. In C. M. Parkes & J. Stevenson-Hinde (Eds.), *The place of attachment in human behavior*. New York : Basic Books.
- Deutsch, H. 1945 *Psychology of women*. New York : Grune & Stratton.
- Egeland, B., Jacobvitz, D., & Papatola, K. 1987 Intergenerational continuity of parental abuse. In J. Lancaster & R. Gelles (Eds.), *Biosocial aspects of child abuse*. Jossey-Bass.
- Egeland, B., Jacobvitz, D., & Sroufe, L. A. 1988 Breaking the cycle of abuse. *Child Development*, 59, 1080-1088.
- Epstein, S. 1980 The self concept : A review and the proposal of an integrated theory of personality. In E. Staub (Ed.), *Personality : Basic aspects and current research*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall.
- 遠藤利彦 1993 愛着と表象 : 愛着研究の最近の動向—内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観—心理学評論, 35(2), 201-234.
- 遠藤利彦・江上由実子・鈴木さゆり 1991 母親の養育意識・養育行動の規定因に関する探索的研究 東京大学教育学部紀要, 31, 131-152.
- Fairbairn W. R. D. 1952 *Psychoanalytic studies of the personality*. London : Tavistock.
- Fogel, A., Melson, G. F., & Mistry, J. 1986 Conceptualizing the determinants of nurturance : A reassessment of sex differences. In A. Fogel & G. F. Melson (Eds.), *Origins of Nurturance*. Hillsdale : Lawrence Erlbaum Associates.
- Fonagy, P., Steele, H., & Steele, M. 1991 Maternal representations of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, 62, 891-905.
- Fonagy, P., Steele, M., Steele, H., Moran, G. S., & Higgitt, A. C. 1991 The capacity for understanding mental states : The reflective self / parent in mother and child and its significance for security of attachment. *Infant Mental Health Journal*, 12, 201-218.
- Fraiberg, S., Adelson, E., & Shapiro, V. 1975 Ghosts in the nursery : A psychoanalytic approach to the problems of impaired infant-mother relationships. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 14, 387-421.
- Friedrich, W. M. & Wheeler, K. K. 1982 The abusing parent revisited : A decade of psychological research. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 170, 577-587.
- Gamezy, N. 1974 Children at risk : The search for the antecedents of schizophrenia, Part 1 : Conceptual models and research methods. *Schizophrenia Bulletin*, 8, 14-90.
- George, C. & Solomon, J. 1989 Internal working models of caregiving and security of attachment at age six. *Infant Mental Health Journal*, 10, 222-237.
- Goldberg, S., Perrotta, M., Minde, K., & Corter, C. 1986 Maternal behavior and attachment in low-birth-weight twins and singletons. *Child Development*, 57, 34-46.
- Goodnow, J. J. & Collins, W. A. 1990 *Development according to parents : The nature, sources, and consequences of parents' ideas*. Lawrence Erlbaum.
- Greenberg, E. F. & Nay, W. R. 1982 The intergenerational transmission of marital instability reconsidered. *Journal of Marriage and the Family*, 44, 335-347.
- Greenberg, M. T., Cicchetti, D., & E. M. Cummings (Eds.) 1990 *Attachment in the preschool years*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Grossmann, K., Fremmer-Bombik, E., Rudolph, J., & Grossmann, K. E. 1988 Maternal attachment representations as related to patterns of infant-mother and maternal care during the first year. In R. A. Hinde & J. Stevenson-Hinde (Eds.), *Relationships within families : Mutual influences*. Oxford : Clarendon Press.
- Grossmann, K. E. & Grossmann, K. 1990 The wider concept of attachment in cross-cultural research. *Human Development*, 33, 31-47.
- Grossmann, K. E. & Grossmann, K. 1991 Attachment quality as an organizer of emotional and behavioral responses in a longitudinal perspective. In C. M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle*. New York : Routledge.
- Haft, W. L. & Slade, A. 1989 Affect attunement and maternal attachment : A pilot study. *Infant Mental Health Journal*, 10, 157-172.
- 橋爪広好・七浦久子・坂井修一・秋山俊夫・山下文雄 1986 心理的距離テストの臨床応用に関する研究 : personal space と母子関係 小児の精神と神経, 26, 225-232.
- Herrenkohl, E. C., Herrenkohl, R. C., & Troedter, L. J. 1983 Perspectives on the intergenerational transmission of abuse. In D. Finklehor, R. J. Gelles, G. T. Hotaling & H. Strauss (Eds.), *The dark side of families*. Beverly Hills, CA : Sage Publications.
- Herzberger, S. 1983 Social cognition and the transmission of abuse. In D. Finklehor, R. J. Gelles, G. T. Hotaling, & H. Strauss (Eds.), *The dark side of families*. Beverly Hills, CA : Sage Publications.
- Hoffman-Plotkin, D. & Twentyman, C. 1984 A multimodal assessment of behavioral and cognitive deficits in abused and neglected preschoolers. *Child Development*, 55, 794-802.
- Horney, K. 1933 Maternal conflicts. *American Journal of Orthopsychiatry*, 3, 455-466.
- Horowitz, B. & Wollock, I. 1981 Maternal deprivation, child maltreatment and agency interventions among poor families. In L. Pelton (Ed.), *The social context of child abuse and neglect*. Human Science Press.
- Howes, C. & Eldredge, R. 1985 Responses of abused, neglected, and nonmaltreated children to the behaviors of their peers. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 6, 261-270.
- Hunter, R. & Kilstrom, N. 1979 Breaking the cycle in abusive families. *American Journal of Psychiatry*, 136, 1320-1322.
- Hunter, R. & Kilstrom, N. 1979 Breaking the cycle in abusive families. *American Journal of Psychiatry*, 136, 1320-1322.
- Jacobson, E. 1968 On the development of the girl's wish for a child. *Psychoanalytic Quarterly*, 37, 523-538.
- Kapp, F. T., Hornstein, S., & Graham, V. T. 1963 Some psychological factors in prolonged labor due to inefficient uterine action. *Comprehensive Psychiatry*, 4, 9-17.
- Kaufman, J. & Zigler, E. 1987 Do abused children become abusive parents? *American Journal of Orthopsychiatry*, 57, 186-192.
- Kempe, C. H., Silverman, F. N., Steele, B. B., Droegemueeller, W., & Silver, H. K. 1962 The battered child syndrome. *Journal of the American Medical Association*, 181, 17-24.

- Kinard, E. M. 1980 Emotional development in physically abused children. *American Journal of Orthopsychiatry*, 50, 686–696.
- Klein, M. (1937) Love, hate and reparation. In M. Klein & J. Riviere (Eds.), *Love, hate and reparation*. London : Hogarth.
- Klimes-Dougan, B. & Kistner, J. 1990 Physically abused preschoolers' responses to peer's distress. *Developmental Psychology*, 26, 599–602.
- Kline, C. L. 1955 Emotional illness associated with childbirth. *American Journal of Obstetrics and Gynecology*, 69, 748–752.
- 小嶋秀夫 1989 養護性の発達とその意味 小嶋秀夫 (編) 乳幼児の社会的世界 有斐閣
- Kohut, H. 1971 *The analysis of the self*. New York : International Universities Press.
- Kotelchuk, M. 1982 Child abuse and neglect : Prediction and misclassification. In R. Starr (Ed.), *Child abuse predictions : Policy implications*. Ballinger.
- Kulmuss, D. 1984 The intergenerational transmission of marital aggression. *Journal of Marriage and the Family*, 46, 11–19.
- Lebovici, S. 1984 Comments concerning the concept of fantasmatic interaction. In Call, J. D., Galenson, E., & Tyson, R. L. (Eds.), *Frontiers of psychiatry, Vol. II*. New York : Basic Books.
- Lebovici, S. 1988 Fantasmatic interaction and intergenerational transmission. *Infant Mental Health Journal*, 9, 10–19.
- Lerner, B., Raskin, R., & Davis, E. 1967 On the need to be pregnant. *International Journal of Psychoanalysis*, 48, 288–297.
- Levine, L., Ward, M., & Carlson, B. 1989 Attachment across three generations : Grandmother, mother, infants. *Paper presented at World Association of Infant Psychiatry and Allied Disciplines, Lugarno*.
- Levine, L., Tuber, S., Slade, A., & Ward, M. J. 1991 Mothers' mental representations and their relationship to mother-infant attachment. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 55, 454–469.
- Lyons Ruth, K., Connell, D., Grunedaum, H., Botein, S., & Zoll, D. 1984 Maternal family history, maternal caretaking and infant attachment in multiproblem families. *Journal of Preventive Psychiatry*, 2, 403–425.
- Maccoby, E. & Martin, J. 1983 Socialization in the context of the family : Parent-child interaction. In E. M. Hetherington (Ed.), *Handbook of Child Development. Vol. IV*. New York : Wiley.
- Main, M. 1977 Analysis of a peculiar form of reunion behavior seen in some daycare children : Its history and sequelae in children who are home reared. In R. Webb (Ed.), *Social development in childhood : Daycare programs and research*. Baltimore : Johns Hopkins University Press.
- Main, M. 1991 Metacognitive knowledge, metacognitive monitoring, and singular (coherent) vs. multiple (incoherent) models of attachment : Findings and directions for future research. In C. M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle*. New York : Routledge.
- Main, M. & George, C. 1985 Responses of abused and disadvantaged toddlers to distress inagemates : A study in the daycare setting. *Developmental Psychology*, 21, 407–412.
- Main, M. & Goldwyn, R. 1984 Prediction of her infant from mother's representation of her own experience : Implications for the abused-abusing intergenerational cycle. *Child Abuse and Neglect*, 8, 203–217.
- Main, M. & Goldwyn, R. in press. Interview-based adult attachment classification : Related to infant-mother and infant-father attachment. *Developmental Psychology*.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood and adulthood : A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points in attachment theory and research. Monographs for the Society for Research in Child Development*, 50, 66–104.
- Main, M. & Solomon, J. 1986 Discovery of an insecure disorganized / disoriented attachment pattern. In T. B. Brazelton & M. W. Yogman (Eds.), *Affective development in infancy*. Norwood, NJ : Ablex.
- Main, M. & Hesse, E. 1990 Parents' unresolved traumatic experiences are related to infant disorganized attachment status : Is frightened and / or frightening parental behavior the linking mechanism? In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, & E. M. Cummings, *Attachment in the preschool years*. Chicago : University of Chicago Press.
- Main, M. & Solomon, J. 1990 Procedures for identifying infants as disorganized / disoriented during the Ainsworth strange situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, & E. M. Cummings, *Attachment in the preschool years*. Chicago : University of Chicago Press.
- Mann, E. C. 1972 Spontaneous abortions and miscarriage. In Howells, J. G. (Ed.), *Modern perspectives in psycho-obstetrics*. Edinburgh : Oliver & Boyd.
- Markham, S. 1961 A comparative evaluation of psychotic and nonpsychotic reactions to childbirth. *American Journal of Orthopsychiatry*, 31, 565–573.
- Matas, L., Arend, R. A., & Sroufe, L. A. 1978 Continuity of adaptation in the second year : The relationship between quality of attachment and later competence. *Child Development*, 49, 547–556.
- McCord, J. 1988 Parental behavior in the cycle of aggression. *Psychiatry*, 51, 14–23.
- Melges, F. T. 1968 Postpartum psychiatric syndromes. *Psychosomatic Medicine*, 30, 95–102.
- Meyer, H. J. 1988 Marital and mother-child relationships : Developmental history, parent personality, and child difficulties. In R. A. Hinde & J. Stevenson-Hinde (Eds.), *Relationships within families : Mutual influences*. Oxford : Clarendon Press.
- Minsky, M. 1986 *The society of mind*. Simons & Schuster.
- Morris, D. 1981 Attachment and intimacy. In G. Stricker (Ed.), *Intimacy*. New York : Plenum Press.
- Nilsson, A. & Armgren, P. E. 1970 Paranatal emotional adjustment. A prospective investigation of 165 women. Part II. The influence of background factors, psychiatric history, parental relations, and personality characteristics. *Acta Psychiatrica Scandinavica Supplementum*, 220.
- Olden, C. 1958 Notes on the development of empathy. *Psychoanalytic Study of the Child*, 13, 505–518.
- Oliver, J. E. & Taylor, A. 1971 Five generations of ill-treated children in one family pedigree. *British Journal of Psychiatry*, 119, 473–480.
- Orford, J. & Velleman, R. 1991 The environment intergenerational transmission of alcohol problems : A comparison of two hypotheses. *British Journal of Medical Psychology*, 64, 189–200.
- 太田信夫 1991 記憶のつめあと : プライミング—もう一つの記憶 イマーゴ, 2(7), 46–51. 青土社
- Parkes, C. M., Stevenson-Hinde, J., & Marris, P. (Eds.) 1990

- Attachment across the life cycle*. New York : Routledge.
- Polansky, H. A., Chalmers, M. A., Battenweiser, E. & Williams, D. 1981 *Damaged parents : Anatomy of child neglect*. University of Chicago Press.
- Reidy, T. J. 1977 The aggressive characteristics of abused and neglected children. *Journal of Clinical Psychology*, 33, 1140-1145.
- Rheingold, J. C. 1964 *The fear of being a woman*. New York : Grune & Stratton.
- Ricks, M. H. 1985 The social transmission of parental behavior : Attachment across generations. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points in attachment theory and research. Monographs for the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104.
- Rothman, D. & Kaplan, A. H. 1972 Psychosomatic infertility in the male and female. In Howells, J. G. (Ed.), *Modern perspectives in psycho-obstetrics*. Edinburgh : Oliver & Boyd.
- Sameroff, A. J. & Emde, R. N. (Eds.) 1989 *Relationship disturbances in early childhood : A developmental approach*. New York : Basic Books.
- Sperling, M. 1968 Actingout behavior and psychosomatic symptoms : Clinical and theoretical aspects. *International Journal of Psychoanalysis*, 49, 250-253.
- Spinetta, J. J. & Rigler, D. 1972 The child-abusing parent : A psychological review. *Psychological Bulletin*, 77, 296-304.
- Squire, L. R. 1987 *Memory and brain*. Oxford : Oxford University Press.
- Sroufe, L. A. 1988 The role of infant-caregiver attachment in development. In J. Belsky & T. Nezworsky (Eds.), *Clinical implications of attachment*. Lawrence Erlbaum.
- Sroufe, L. A. & Fleeson, J. 1986 Attachment and the construction of relationships. In W. W. Hartup & Z. Rubin (Eds.), *Relationships and development*. Hillsdale, NJ : Erlbaum.
- Sroufe, L. A. 1990 An organizational perspective on the self. In D. Cicchetti & M. Beeghly (Eds.), *The self in transition*. Chicago : University of Chicago Press.
- Sroufe, L. A., Jacobvitz, D., Mangelsdorf, S., DeAngelo, E., & Ward, M. J. 1985 Generational boundary dissolution between mothers and their preschool children : A relationship systems approach. *Child Development*, 56, 317-325.
- Stark, E. 1985 Women battering, child abuse, and social heredity : What is the relationship? *Marital Violence. Sociological Review*, 31, 147-171.
- Steele, B. F. & Pollock, D. 1968 A psychiatric study of parents who abuse infants and small children. In R. E. Helfer & C. H. Kempe (Eds.), *The battered child*. Chicago : University of Chicago Press.
- Stern, D. 1971 A microanalysis of mother-infant interaction : Behavior regulation social contact between a mother and her three and a half months old twins. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 10, 501-517.
- Stern, D. 1985 *The interpersonal world of the infant*. New York : Basic Books.
- Stern, D. 1989 The representation of relational patterns : Developmental consideration. In A. J. Sameroff & R. N. Emde (Eds.), *Relationship disturbances in early childhood : A developmental Approach*. New York : Basic Books.
- Sullivan, H. S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. New York : Norton.
- Takahashi, K. 1990 Are the key assumption of the 'strange situation' procedure universal? A view from Japanese research. *Human Development*, 33, 23-30.
- Troy, M. & Sroufe, L. A. 1987 Victimization among preschoolers : The role of attachment relationship history. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 26, 166-172.
- Tulving, E. 1972 Episodic and semantic memory. In E. Tulving & W. Donaldson (Eds.), *Organization of memory*. New York : Academic Press.
- Tulving, E. 1991 (太田信夫訳) 人間の複数記憶システム 科学, 61, 263-270. 岩波書店
- Uddenberg, N. 1974 Reproductive adaptation in mother and daughter. *Acta Psychiatrica Scandinavica. Supplementum*, 254.
- Van IJzendoorn, M. H. 1992 Intergenerational transmission of parenting : A review of studies in nonclinical populations. *Developmental Review*, 12, 76-99.
- Ward, M., Carlson, B., & Kessler, D. B. 1989 Adolescent mother-infant attachment : Interactions, relationships and adolescent working models. *Submitted manuscript*.
- Widom, C. S. 1989 Does violence beget violence? A critical examination of the literature. *Psychological Bulletin*, 106, 3-28.
- Winnicott, D. 1965 *The family and individual development*. London : Tavistock.
- Winnicott, D. 1968 *Infant feeding and emotional development*. *Maternal and Child Care*, 4 (33).
- Zeanah, C. H. & Anders, T. F. 1987 Subjectivity in parent-infant relationships : A discussion of internal working models. *Infant Mental Health Journal*, 8, 237-250.
- Zeanah, C. h. & Zeanah, P. D. 1989 Intergenerational transmission of Maltreatment : Insights from attachment theory and research. *Psychiatry*, 52, 177-196.